



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	ルイ著 バルビエ画 ビリティスの唄
Author(s)	能澤, 慧子
Citation	文化女子大学図書館所蔵西洋服飾関係欧文文献解題・目録 続 (1990-12) pp.60-61
Issue Date	1990-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10457/1682
Rights	

Louÿs, Pierre et Barbier, G.

Les chansons de Bilitis; traduit du grec.

Paris, P. Corrad, 1922. (文献番号9-168)

ルイ著 パルピエ画

ビリティスの唄

詩篇『ビリティスの唄』はその序文において、およそ24世紀もの昔に葬られた一人の遊び女ビリティスの墓の内壁に、彼女自身によってギリシャ語で記されていたもので、G. ハイムなる人物によって近年発見されたと紹介されている。しかし、実際にはそれは1894年に、詩人P. ルイ(1870—1925)がアラビア系的美貌の娼婦をモデルに創作、発表したものである。したがってビリティスは実在ではなく、詩人が生み出した架空の女性であり、発表当時はそのいかにも女性の手によるかのごとき表現や、もっともらしい序文の語り口、第4章として構成された同作品の書誌などのために、彼の虚構を真実と受け取る人も少なくなかったと言われる。

序文に続く詩篇は3章からなり、パンフィリー(現在のトルコの南西部の地中海側に位置する)、レスボス島、キプロス島を舞台に、ビリティスの思春期の恋の目覚めから、成熟期を経て死にいたるまでの同性愛と異性愛の遍歴が物語られているが、とりわけその前者における繊細で甘美な情感が、彼女の生身の身体まで彷彿とさせるかのごとき心の内側の密やかな動きまで表した詩文によって、牧歌的に、あるいは官能的に、そして叙情豊かに唄われている。またそこに感じ取れる異教世界や古代の描写は、新鮮なエキゾティシズムと夢幻のようなエロティシズムを漂わせている。発表以来その人気は高く、根強かったが、我が国でもすでに数種類の抄訳、及び美しい挿画入り完訳書が出版されている。

さて標題の書は、この詩篇に木版とポショワールによる13枚のプレートと30点の挿画をそえて、すべてジャポン紙に刷ったカイエ形式の、本というよりは、美術品のような書物である。プレートと挿画の原画はジョルジュ・バルピエ、版刻はF. L. シュミッド(Schmied, F.L.)、刷りはピエール・ブーシェ(Bouchet, Pierre)による。また麻布を貼った帙にはグログランのリボンの葉が添えられ、それには直径4.6cmのメダルが付いている。その彫金の作者はアルバール・ポンミエール(Pommier, Albert)と記されている。125部の限定出版であり、本学図書館所蔵のものはその110番に当る。



バルビエについては、本学『図書館欧文献目録』、『西洋服飾ブック・コレクション』、また『図書館だより』の稀観本の欄などですでに幾度も紹介されている。しかしこれらにとり挙げられた作品が大なり小なりモードに関わっているのに対して、本書は現実のモードとは殆ど関わりがない。もっともベネツィの辞典では彼の作品の筆頭には文学作品の装飾画を掲げており、モード誌類についてはむしろ付随的に扱っている。

『ピリティスの唄』は勿論その前者に属し、中でも代表作とされているものの一つである。彼のこの種の作品群では、たとえば20世紀フランスのシュール・レアリズムの詩人アンリ・ド・レニエの『逃避』(L'Escapade. 1931)におけるような、ロココ・スタイルの服装の人物が多く見受けられるのだが、本書に描かれた人物は大概裸体、もしくはそれに近い、ちっぽけなギリシャ風ドレーパリーを纏っているだけである。しかし彼一流の流麗な線で表わされた男女の肢体は官能的で優雅な魅力を湛え、抑えた色調と溢れるように豊かなギリシャ風の装飾は、この期のモードをも含む装飾画の粹を示しているといえよう。そして同時にこの作品を通して、アール・デコ様式に内在する古典主義的側面も感じ取ることができる。

図は第2章「ミティーレーネの哀歌」の中の詩「めぐり会い」

(能澤)